

いの流水俳壇

「当季雑詠」

特選

めりはりの風のありけり麻のれん

刈谷 志津選

(評) 麻は一年草で、丈は1〜2メートルにも達し、晩夏の頃に刈り取って茎の皮から繊維を取り、麻糸として織られる。丈夫で涼しい麻は高価で、身近な物では洋服、和服に使用され、また格式のある老舗の「のれん」としても掛けられる。揚句の「麻のれん」は作者の部屋の間仕切りか、日除け用に垂らしていると思われる。開け放たれた夏の部屋そこに掛けられた麻のれんをくぐる「めりはりの風」が緩やかに、また、いっばいにふくらんで揺らしてゆく。熟練の形容「めりはりの風」と「麻のれん」が上手に溶け合って、涼しさを盛る一句。

雨上がり生命の限り蝉時雨

岡村 嘉夫

(評) 蝉は雨が止み、日差しが戻ると樹々に陣取り、この時を待っていたかのように一斉に鳴き始める。この様子を雨が突然に降り出した感じがするので、「蝉時雨」と言う。蝉は夏の目をやましく鳴くので、昆虫の音楽家とも言われている。また蝉の幼虫は、地中で植物の根から栄養分を吸収し、数年かけて地上に出て成虫となる。成虫の命は短く数日である。この短命を蝉は知っているのかも。命のある最後まで「生命の限り」鳴いて、子孫を残す任務を果たして逝く。これで鳴き声の必死さもよくわかり伝わる。作者は季語「蝉時雨」の本質を捉えて見事。

岩の上刈り残されし鹿の子百合

片岡 豊子

(評) 百合は初夏の頃から一茎に一花、または数花の美しい花をつけるが種類も多く、花色も趣も異なる。「鹿の子百合」は崖や滝などに生えるので、土佐では「滝白百合」とも言う。白色で内面に淡紅色のぼかしが入っている。作者の住まいは中迫の山頂にある。そこには幾つか滝があったが、今は滝を削り生活道としている。残った滝岩の上には、毎年「鹿の子百合」が花を咲かせる。あたり一带の草刈りが行われても、鹿の子百合は刈り残されて、里人の暮らしに花の灯りをともす。過疎化が進み人は去っても、鹿の子百合は、いつまでも咲き続けることであろう。

入選

ややこしい台風がいる昼のめし
真夏日や道道陰を拾い行く
夏の浜別かれし人は若きまま
油照り海の底なる輸送船
遠き日の話のつづき百日紅
刈り込んだあとの勢い草茂る
一日の終りはいつも髪洗ふ

二句抄

風蘭の垂れて夕の香となりぬ
咲き続く力強さよ百日紅
チコちゃんに叱られている蝉の声
舟虫も火星も波の音のなか
神の火を手にした驕り原爆忌
紙破れ群に逃るる金魚かな
女郎花挿せば窓辺に風少し
この夏を老の頑張り万歩計
悶えるの二転三転明け易し
短夜や渚の塵を拾いおり
雨あがり初めて聞きし蝉の声
昼寝覚めここは何処かと見まわして
同期生死を悲しみて暑氣払い
虫干しや背広に思ひなつかしい
溝の上今年も咲いた白百合が
国技館一度行きたい夏の場所
熊蜂の声樹をゆすり庭ゆする
合飲の葉の今日の暑さを包み閉づ

次題「当季雑詠」

締切／毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町170001

0893-1922

有料広告

医療法人 森木病院
光生会

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL (088) 893-0014

内科
外科
小児科
循環器内科
消化器内科
リハビリテーション科
人工透析